

【理科】

1 昨年度の授業改善推進プランの検証・評価

○各学年とも、平均正答率では目標値を超えている。昨年度から引き続き、問題解決の学習を繰り返し行い、導入で問題意識や興味・関心を高める工夫を続けてきた結果である。また、理科で培った力をサイエンスコミュニケーション科の学習にも生かし、問題解決の流れを理解することにつながっている。今後も問題解決の学習を大切に授業づくりに全校で取り組む。

△問題解決の流れを理解し、校内で課題に向けて取り組んだことで5・6年生の平均正答率が上がった。しかし、知識や技能の定着、思考・判断・表現で理解が不十分な単元もある。そのため、各単元の終わりに、学習したことの確認や復習を十分に行い、知識や技能を確実に身に付けさせる必要がある。

2 今年度の調査結果の分析と結果に基づく課題

	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
調査結果の分析	正答率が、大田区の平均値より高い結果になった。 【4年生】 特に、「物の重さ」の単元に関する問題では、区の前年度より大きく上回った。SC科「めざせ！こまキング！」など、物の重さによって結果が変わるような実験を数多く行うことにより、児童が物の重さを意識できたことが要因と考えられる。	正答率が、大田区の平均値より高い結果になった。 【5年生】 特に5年生は他の小学校よりも高い数値となった。記述問題の正答率の高さが理由に挙げられる。5年生の児童が記述問題で得意にしている要因は次のことが考えられる。 ①「考察」（実験に対する自分の考え）のやり方を丁寧に指導したこと ②何度も繰り返し行うことでの書くことへの慣れたこと ③友達同士による価値づけにより自信をつけたこと	正答率が、大田区の平均値よりも高い結果になった。 【6年生】 区の平均値が『50%』となっている中、本校の児童は高い数値を示している。 それは、1年生からSC科を通して身の回りの自然現象と触れ合う機会が多くあり、本物を見たり、触れたりといった体験的な活動や単元導入の工夫を行ってきたことで、児童が科学への興味・関心をもたせることができたと考えられる。
課題	正答率を観点別に見ると、「生命・地球」分野に関する「知識・技能」についての定着が不十分な問題がある。「物質・エネルギー」分野に比べると、児童が問いを見出しにくい点、自分事として実験や観察を行っていない場面が見受けられる。そのため、知識の定着がしづらいたと考えた。		

3 授業の具体的な改善策

教科目標	学習指導要領の教科の目標 自然に親しみ、理科の見方・考え方を働かせ、見通しをもって観察、実験を行うことなどを通して、自然の事物・現象についての問題を科学的に解決するために必要な資質・能力を次のとおり育成することを目指す。 (1) 自然の事物・現象についての理解を図り、観察、実験などに関する基本的な技能を身に付けるようにする。 (2) 観察、実験などを行い、問題解決の力を養う。 (3) 自然を愛する心情や主体的に問題解決しようとする態度を養う。
全体	主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善 - 児童が主体的に進める問題解決の流れを徹底しOJT研修などで理科の授業の流れや指導方法についての確認を行い、統一した指導を実施することで児童の問題解決能力を高める。 - 実際に実験したり観察したりする活動時間を十分に確保し、実感を持った理解ができるよう学習状況を丁寧に見取り、学び残しやつまづきに適切な指導を行うとともに、積極的に知識や技能の定着の確認をしていく。 - 結果の見通しをもちながら観察・実験を行い、常に自分の考えと対比させていくことや、「一人一人がどのように予想し、友達と話し合う中でどのように考えが変化したか」「得られた結果から自分の予想を振り返り、どのように考察したか」等を、児童相互の対話やノートへの記述などから見取り、適切に指導していくようにする。
学年段階別改善策	
中学年	○自然の事物・現象の変化を、自分の予想や結果と関係付けながら考察し、理科の見方や考え方を働かせ、主体的な問題解決での活動を通して、資質・能力を育成できるようにする。 ○1グループ3人程度とすることで、主体的に実験・観察に取り組み、一人一人の知識・技能の定着を図る。また、着目する視点を明確にすることで、目的をもって実験や観察に取り組めるようにする。 ○生物を飼育する際に、児童の目の届くところで飼育するとともに、成長過程で大切な時期には観察を行い、ポイントを押さえるようにする。
高学年	○実験結果から考察する過程に重点を置き、「結果から考えると、～ということが言える。」「AとBの結果を比べると、～と考える。」など、事実（実験結果やデータ）を基に考えたり、推論したり、考察したことを分かりやすく表現したりする力を養う。 ○解決したい問題について必要な器具や実験方法を考える時間を十分に確保し、演習実験で実験方法を確かめさせたり、板書を視覚的に捉えられるように工夫したりして、児童が主体的に実験を行えるようにしていく。 ○個人での結果分析や考察の時間を十分に確保し、自分と友達の考えを客観的に比較し、分かりやすく説明したり、問題点を指摘したりする中で、多面的に議論し、より妥当な考えを導き出すことができるようにしていく。